

研究課題 (テーマ)		看護学生間でのロールプレイを用いた ケアコミュニケーション技術教育法の効果に関する情報学的検討	
研究者	所属学科等	職	氏名
代表者	看護学部	教授	岡本 恵里
分担者	看護学部	教授	竹内 登美子
	看護学部	講師	青柳 寿弥
	工学部	教授	唐山 英明
	工学部	准教授	高野 博史
	工学部	講師	木下 史也
	東京医療センター	総合内科医長	本田 美和子
	京都大学情報学研究科	准教授	中澤 篤志
研究結果の概要			
<p>【目的】本研究の目的は、看護学生間でのロールプレイを用いた「ケアコミュニケーション技術教育法」の効果を、情報学的手法等を用いて検証することである。</p> <p>【背景】若者のコミュニケーション能力の低下が危惧されている今日、看護学部では質の高い看護専門職になるための教育として、世界に先駆け「ケアコミュニケーション技術教育 (ユマニチュード®)」を教育課程に組み込んでいる。本授業の教育プログラムを通し、受講した学生らが、どのようにコミュニケーション能力を獲得しているのかを把握し、今後の教育に活用する。</p> <p>【対象】看護専門科目 (必修科目) である「看護ケアとユマニチュード I」を受講する 1 年生の中で、研究の同意が得られた学生 5 名とした。</p> <p>【方法】研究対象者である看護学生に、受講前後に模擬患者に向けて看護ケア技術を実施してもらい、その様子をビデオ撮影 (音声記録付) した。ビデオカメラは①学生の視点による 1 人称小型カメラ、②全体像を撮影する 3 人称カメラ、③模擬患者視点による 1 人称カメラの 3 種類を用いる。模擬患者は、対象者とは面識のない健康な成人男性とした。実施するケア技術は、①椅座位姿勢の患者とのコミュニケーション、②ベッド上の仰臥位から側臥位への体位変換であり、別々の模擬患者に実施した。</p> <p>【分析】動画データからは「対象者が模擬患者の顔を見ている検出割合、対象者の顔と模擬患者の顔までの距離の推定、対象者が模擬患者の身体に触れている部位とその時間」等を抽出した。音声データからは「発話継続、間の取り方、発話回数、ポジティブな発話内容」等を抽出した。</p> <p>【結果】動画および音声データの分析により、すべての対象者が受講前より受講後の方がユマニチュードのケアの基本である「見る・話す・触れる」の 3 つの視点において技術が向上していた。「話す」では、受講前は何も話さない“会話の間”が長く、模擬患者に「～できますか？」と質問する場面が多かった。受講後は“会話の間”はなくなり、途切れなく話していた。加えて「嬉しい、楽しい、顔色がよい、温かくなった」等のポジティブな言葉が増えていた。</p>			
今後の展開			
「見る・触れる」技術の客観的な映像分析を継続していく。また、顔注視データのキャリブレーション方法については検討中である。			